

裸婦

熊谷九寿

制作年：1938(昭和13)年

サイズ：80.3×116.7cm

材質：油彩、カンヴァス

所蔵：中津市木村記念美術館

1993(平成5)年中津市に寄贈される。



自然を描く対象としてきた熊谷ですが、人も描いています。熊谷は昭和14(1939)年の資生堂ギャラリーでの初個展に、未完成の「裸婦」(50号)を出品しましたが、中津市の「裸婦」がこの出品作にあたるのかどうかは確定できません。ただこの作品は熊谷が描いた裸婦像の初期のものと思われます。後に「赤い裸婦」(昭和26(1951)年第25回国画会展出品)「裸婦(黒)」(昭和42(1967)年第41回国画会展出品)などを制作しました。

ここに描かれた裸婦は、例えば洋画のアカデミズムの伝統的な裸婦像とは全く異なった見方に支えられている事がわかります。しなやかで豊満な肉体を横たえた赤土色の裸婦は、肩から上、特に顔貌が省略され、見る側の視線が集まる表情の個性を持たない事によって、肉体全体の持つはちきれんばかりの力をより強く伝えています。「裸婦」という一人の女性を描いたというよりも、「裸婦」の姿をかりて、性別や年齢を越えた人体の生命力そのものを描きたかったのではないのでしょうか。